井芹祭書評コンテストH26 応募用紙

図書名 神様のカルテ3　著者名 夏川草介　出版社 小学館

この小説は主人公一止が医師として勤務する本庄病院を主な舞台にした物語だ。近年、医療小説や医療ドラマが流行しているが、数多く存在する医療小説とは一線を画している。人気の医療系小説やドラマには、スーパードクターが存在し、手の施しようがないと思われた患者ですら難易度の高い手術により華麗に救うという、私達の願望を反映したかのようなものが多い。しかし、この小説のシリーズには助からない患者も多く描かれている。名医は存在するにも拘わらず、救えない命に焦点が当てられている気さえする。この作品は私達に現代医療、特に地域医療の現実を、理想ではなく限界を突きつける。それは同時に医師も元は一人の人間に過ぎないという当たり前のことを読者に痛感させる。スーパードクターは現実に存在しない、医師にも一般人と同じ生活がある。医師も自分達と同じだと多くの読者は再認識するであろう。

このように、読後に私達が感じるのは名医が活躍するドラマを見た後の爽快感ではない。では、医療の限界への絶望や悲しみであろうか。そうではない。人々の心を深く打つのは人が人を想うあたたかさであろう。登場人物は個々の事情を抱えつつも、患者の為にという信念をどこかに持っている。地域医療という医師にとって過酷な現場で、愚知を零したり反発したりしながらも結局は患者の為にという精神が垣間見られる。本庄病院こそが私達にとって真に理想的な病院のように思えてならない。本作品の最後に一止はより良い地域医療の為にはただ頑張るだけの今の自分ではダメだと感じ大学病院へ最先端医療を学びに行くことを決意する。懸命なだけで、万事上手くいく訳ではないという一止の言葉は耳が痛いと感じる人も多いのではないか。そして多くの読者は、この言葉を残した一止に対して願うだろう。いつかスキルアップした後で本庄病院に再び戻って来てほしいと。その姿を見てみたいと。

600